

▲△▲ 谷川連峰主脈縦走（個人山行） ▲△▲

赤澤 東洋

◎期日：2019年8月12日～13日 ◎メンバー：単独

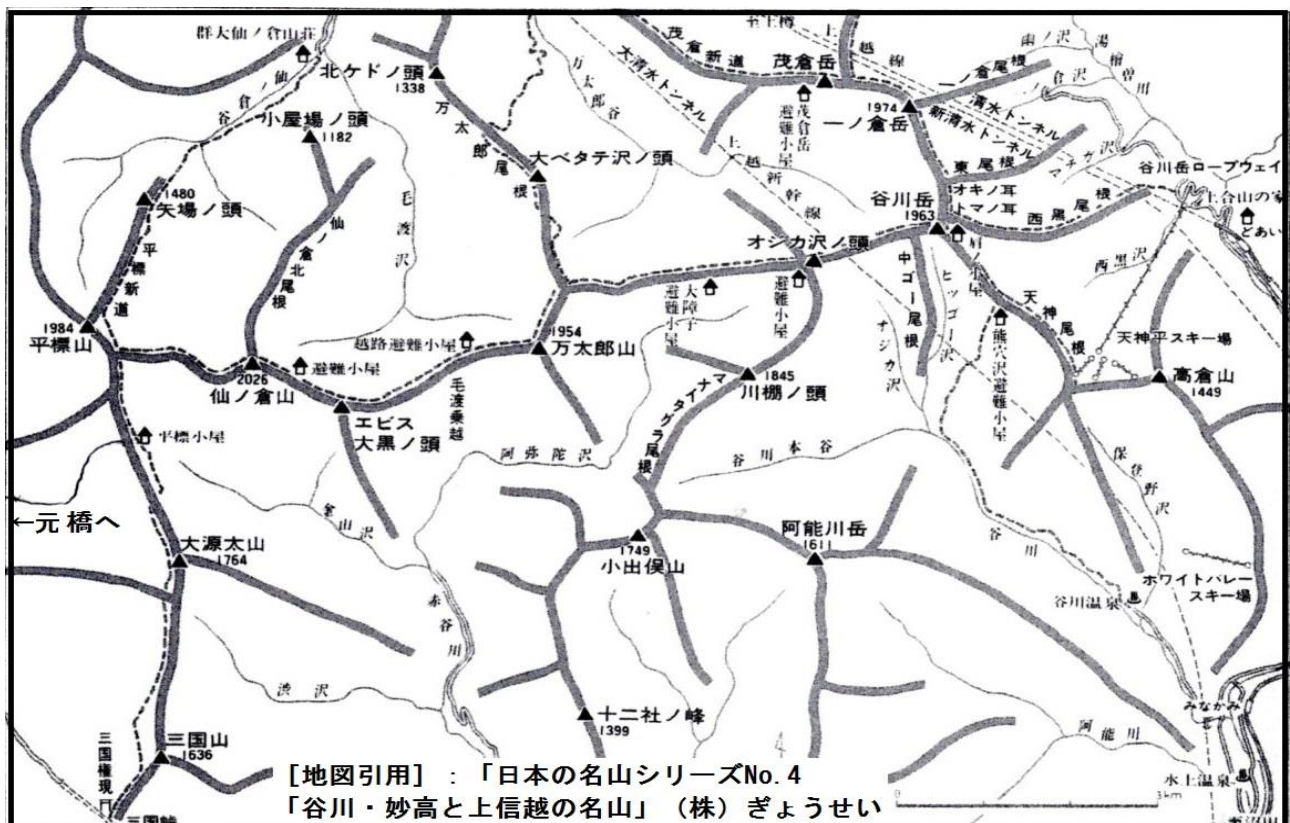
ここらが潮時と怠惰な独身生活におさらばし身を固めたのが30歳の時、転職と重なり何かと繁忙、高校時代から続いていた登山はすっかり足が遠のいた。スキーは続けていたが山の代りに始めたのがゴルフと麻雀、これは仕事にも繋がり、首を突っ込んだ以上もう抜けられなくなり、酒量も増えてある意味では独身時代よりさらに無為、怠惰な日常に埋没した。

川崎の高校で国語教師をするスキー仲間のTは、山岳部の顧問をしており、会う度ごとに山の楽しさ、素晴らしさを熱っぽく語ってくれたが、関心のないこちからは「そんなかったるい事ようやるもんだな」なんて水を差し、友を白けさせていたものだった。

それがまあ酔いに任せて大ボラこいて槍・穂の大キレットに挑む事になってしまったのだ。これも又数知れぬ酒席での失敗談、酔眼朦朧の果、またまたやってしまったかと後悔するも後の祭りとはこのこと。

1990年、48歳の時だった。大口叩いた手前、何とかせねばと顔色変えてあたふたと秋葉原へ駆けつけ登山靴と大型ザックを購入、まずは足慣らしと出かける事にしたのがこの谷川連峰主脈縦走なのであります。

谷川岳に最初に登ったのは高校2年の時、以来6回程登り少しばかり土地勘があったとはいえ、縦走は初めての事、不安はあったが、天気が良ければ何とかなるだろうと若さに任せた。90年6月23～24日、ソロ。ルートは天神平→肩の小屋→大障子避難小屋（泊）→万太郎山→仙ノ倉山→平標山→土樽で、最後の仙ノ倉谷吊り橋からの林道歩きはバテバテ、ゴルフとは格段に異なる運動量に己の鍛錬不足を思い知り愕然、こりやダメかと暗くなった。



が、何はともあれ完歩できたのはまずは祝着。翌月、本番の槍・穂も天気にも恵まれルンルン気分がクリアー、この2回の体験ですっかり自信つけ山にハマってしまい今日に至っているという訳である。

齢重ねてあれから29年、喜寿も迎えて元気な内に行きたい山、行かねばならない山は数知れずだが、優先順位の上位にあるのが、この再縦走で今夏これがラストチャンスと思い切って出かける事にした。

実は96年9月にも単独で歩いており(この時は平標山からは松手山経由元橋)、これが3度目の挑戦、曾遊の地への思い出旅行とシャレ込んだ次第。

今夏は記録破りの日照不足、大気はずっと不安定という中、まだ梅雨明け宣言も出ていない7月25~26日、わずかなお日様マークに迷わされ決行したのだが、オジカ沢の頭を過ぎた笹尾根で雨が降り出し「ドン！」という雷様との遭遇、1週間前に大塚講師による「ワンポイント山の気象講座・落雷」を受講したばかり。「ここで雷かよ！洒落にもならんな」と我が不運を嘆き、熊笹の中に逃げ込んだ。天気良ければ前方に万太郎山を見ながら気持ち良く歩ける緩やかな草原は逃げ場もなく、「やっぱりダメだったか。梅雨明け宣言まで待つべきだったか」と臍を噛む。

幸いに赤谷川から流れる雷雲の動きは早く、気まぐれ雷光も20分程で小康状態となり、濡れネズミとなって大障子避難小屋へ逃げ込んだ。29年前の小屋は壁は隙間だらけで、雨漏りで土間は水が溜まりジメジメしかなり傷んでいたが、今は板の間に改修されており、棚には銀マットも置かれて綺麗になっていた。混みあった時に備えてテントを担いできたが、今日は他に誰も来そうもなく、小屋前のテッポウも水溜まりとなっているので迷わず板の間に転げ込み、濡れた着替えを済ませた。

夜中、暴風吹き荒れ小屋を揺るがし殆んど眠れず3時前に起きた。風は収まったものの、辺りはガスに覆われ何もかも湿っぽく、気が乗らない中、まずは万太郎山までと一歩踏み出す。6時、万太郎山に到着し、ここで晴れそうなら前進のつもりだったが、相変わらずガスっていて展望もないので、ここは一先ず撤退とし、土樽へ下山する事にした。

18日後、雪辱晴らすべく今度は逆方向から挑んでみた。2日間の晴れマーク信じ8月12日JRと南越後バスを利用し、元橋から平元新道を辿り、平標山の家に入る。そよとも風の吹かぬ蒸し暑い日で、樹林帯の中汗びっしょりとなり、軽い熱中症気味、登山口から2時間40分かけて山の家到着。ここは食事つきの営業小屋に並んで避難小屋も併設されており、掃除も行き届き綺麗で清潔な避難小屋だ(有料・2000円)。避難小屋利用は一人だけ、貸し切り状態で快適だった。夜中久し振りにオリオンの三ツ星が見えた。

8月13日、3時半起床。独り占めの小屋は誰にも気兼ねなくガサガサと出発準備、ヘッドランプ無しでも歩ける明るさ待ち4時半出発する。しばらく登って振り返る目に大源太山の上に見たこともない巨大なキノコ雲が飛び込んできたので写真に収める。

平標山頂上まで50分、まずまずの出足である。今回はテント無しなので長丁場を想定しザックの重量は10kg以内にと決めてきたのだ。ここからいよいよ国境稜線の縦走となる。この稜線は太平洋側と日本海側を分ける分水嶺、右手赤谷川は利根川に注ぎ太平洋に、左手仙ノ倉谷は魚野川をへて信濃川となって日本海に流入する。一目瞭然、この分かり易さが本ルートの良い所、



(大源太山の上に見えた巨大なキノコ雲)

天気はまずまず、雲海の上に顔を出す浅間山の右手に槍ヶ岳のように尖がる四阿山が嬉しい。この時期にしては遠く北アルプスの白馬連峰まで見え、2012年10月の笹穴沢遡行を思い出しながら、ハクサンフウロやシモツケソウの咲く仙ノ倉山まで緩やかな頂稜を満喫した。

6時半、仙ノ倉山頂に立つと、それまで見えなかったエビス大黒の頭が目前に大きく聳え立ち「ウヒャー、あれに登るのか」と思う。



(仙ノ倉よりエビス大黒の頭)

谷川連峰の最高峰仙ノ倉山から250m程下り、また100m程登り返さねばならないのだが、実際は見た目ほどでもなく、1時間程でエビス大黒の頭に辿り着いた。



(エビス大黒より万太郎山。遠くに谷川岳の耳二つ)

先客が一人いて、3時半にオジカ沢の頭避難小屋を出たのでここまで4時間程だった由、若さだろう。谷川岳を世に紹介した大島亮吉の「谷川岳、茂倉岳、笹穴沢上流」に拠れば昭和2年(1927)9月初めにエビス大黒の頭に登った時、そこに大正4年(1915)の落書きのある鉱山の廃坑があったと記している。「こんな山奥によくぞまあ！」とそれらしき個所を探してみるが100年も前の事でまったく分からない。鉱山は法師温泉のご先祖が関係していたと聞いた事がある。

まだ8時前、時間はたっぷりありそうだが、先を急ぐ。ここから本ルートの最低鞍部毛渡乗越まで320

下り、万太郎山まで約 400 ㍍の上り返しで、まさに体力勝負、日差しは強く暑いのだが時には帽子も飛ばされそうな風が吹いて発汗を抑えてくれるのが有難い。

万太郎への上りにかかる今懐かしい<マツダランプ>の道標が立っていた。

昭和 25 年 (1950) 年 11 月東芝山岳部 3 名、三井鉱山パーティ 3 名が遭難、6 名中 5 名が亡くなるという悲劇をきっかけに事故後、東芝が設置したもので、その一部が 70 年近い風雪に耐え錆び付いて残っているのだ。



(錆び付いて残っていた「マツダランプ」の道標)

10 時 25 分、青息吐息で万太郎山頂上着。出発から丁度 6 時間、ここではぼ中間点、2 つ耳の谷川岳はまだまだ遠く、コースタイムより 1 時間以上オーバーは先が思いやられて、一瞬土樽へのエスケープが頭を過ったが、ここまで来て諦めるのは情けないと改めて気合を入れ直した。

その先も嫌になる位に長かった。午後になると計ったように雲が出てきて、降雨の恐れもあり気が急ぐものの足はあがらず、ハアハア、ゼーゼー、もう目いっぱい、天神平ロープウエーの最終便に間に合わなかったらどーしようと 1 昨年のアラリンホルンを思い出し焦ってくる。

14 時丁度肩の小屋到着。小屋番さんに最終便は夏のシーズン中は 5 時と聞き、ホッと一息、結局は 15 時 55 分のロープウエーに乗り、水上へのバスの乗り継ぎも順調で 19 時半帰宅する事が出来た。かくて今生の見納めにとチャレンジした谷川連峰主脈縦走は無事完歩、荷物を極力減らした事と天候に恵まれての結果とはいえ、薬師～黒部五郎への足慣らしにはなったに違いなくひとり悦に入り、次の山行に思いを馳せた。

<コースタイム>4 : 25 平標山の家発、6 : 30 仙ノ倉山、7 : 40 エビス大黒の頭、10 : 25 万太郎山、
12 : 45 オジカ沢の頭、14 : 00 肩の小屋、15 : 50 天神平 R W 駅

注)マツダランプ=東芝の電球のブランド名。松田ではなくゾロアスター教の最高神「アフラ・マズダー」に由来(Wikipedia)

(了)